

## 16 泌尿器科診療における漢方薬処方の実際 ～漢方診療に関する多施設アンケートから～

香川大学 医学部 泌尿器科

加藤 琢磨、阿部 陽平、内藤 宏仁、松岡 祐貴  
宮内 康行、田島 基史、田岡 利宜也、常森 寛行  
上田 修史、杉元 幹史、笥 善行

### 【目的】

昨年我々は泌尿器科診療における漢方診療の現況についてアンケート調査を行った。今回、実臨床における漢方薬処方の実際を明らかにし、処方に影響及ぼす背景因子を探索することを目的にアンケートの解析を行った。

### 【方法】

2017年11月から12月に全国の大学附属病院87施設、1343人にアンケートを送付した。アンケートの主な内容は泌尿器科医師経験年数、性別、専門領域、東洋医学教育の経験、情報ソース、漢方診療に対する意識調査、適応疾患、頻用する漢方薬とした。無記名にて匿名化し、計20個の質問に対して単回答(SA)あるいは複数回答(MA)にて回答を求めた。

### 【結果】

77施設より計926件の回答があり、アンケートの回収率は68%であった。各年代よりほぼ均等に回答が得られたが、男性医師が9割を占めていた。専攻分野は腫瘍が最も多く、ついで泌尿器科一般、排尿障害、腎不全、尿路結石の順であった。

『泌尿器科経験年数20年以下の医師』の7割以上が月に数回以上の頻度で漢方薬を処方しており、『泌尿器科経験年数21年目以上の医師』に比べて有意に処方の頻度が多かった( $p<0.05$ )。学生時代に漢方教育を受けた医師は、教育機会のなかった医師に比べて、有意に高い頻度で漢方薬を処方していた( $p<0.05$ )。小児泌尿器科分野を除き、各分野の7割以上の医師は月に数回以上の頻度で漢方薬を処方していた。所属施設が漢方診療に積極的であると、漢方薬の処方頻度は増す傾向にあった。実際に「証」に基づいて漢方薬の処方をおこなっている泌尿器科医は2割程度であり、診断病名に基づき漢方薬を処方していることが明らかになった。漢方薬は「治療の選択肢が広がる」、「効果が期待できる」といった肯定的な理由で処方されている一方で、「他に効果的な治療法がない」「以前の医師の処方を引き継いで」といった消極的な理由で処方されていた。

漢方薬の処方を検討する泌尿器系疾患は過活動膀胱(67%)、夜間頻尿(45.9%)、前立腺肥大症(41.5%)の順で多く、汎用される漢方薬は猪苓湯(75.9%)、牛車腎気丸(74.6%)、八味地黄丸(59.8%)の順であった(MA)。泌尿器科領域以外に漢方薬が検討される疾患は便秘(54.8%)、抗がん剤関連症状(51.7%)、感冒(41.2%)の順であり、処方する漢方薬は大建中湯(82.8%)、葛根湯(51.5%)、芍薬甘草湯(45.8%)の順であった(MA)。

### 【結語】

泌尿器科領域では漢方薬は治療選択肢の一つとして汎用されていたが、処方の根拠は診断病名に基づいていた。処方頻度の増加因子として、20年目以下の若手医師、漢方教育、所属施設の漢方に対する積極性が考えられた。我々の想定を超えて、泌尿器科医師は多種の疾患に対し、漢方薬を処方していた。